

JASE 現代性教育研究ジャーナル

2012年
No. 21

2012年12月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 眞 編集人 本橋道昭
© JASE 2012 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

「関西性教育研修セミナー2012夏」報告	1	今月のブックガイド	9
北丸雄二のニューヨークリポート②	7	JASEインフォメーション	10
「ありのままのわたしを生きる」ために②	8		

■ 「関西性教育研修セミナー 2012 夏」報告

性の教育とアドボカシー

2012年8月6日（月曜日）午後6時より、大阪府立大学中之島サテライト2階講義室において、「関西性教育研修セミナー 2012 夏」が開催された。今回のテーマは「性の教育とアドボカシー（権利擁護）」、その概要を報告する。

主催：関西性教育研修セミナー実行委員会

多彩な講師たちを迎えて

今回のセミナーの講師陣は、2012年8月2日から4日まで、島根県松江市で開催されたアジア・オセアニア性科学学会（AOCS）に海外から参加した研究者5名である。

セミナーは、通訳のPamela Mitchell（ハワイ大学大学院生・医療人類学専攻）の自己紹介から始まった。Mitchellは、日本に滞在し大阪市立都市研究プラザでHIV/AIDSの研究を行っている。続いて第二部の講師の1人でもある同志社大学准教授のPhillip Tromovitchが自己紹介を行い、その後、第一部の連続ミニ講義に入った。

最初は、Milton Diamondハワイ大学医学部教授で、これまでの研究と性教育の現状について講義を行った。続いて、香港から来日したSam Winter香港大学准教授がトランスジェンダーについて、同じテーマ



ミニ講義の様子

でオーストラリアから来日したElizabeth Riley、彼女はトランスジェンダーの家族や子どもに詳しいカウンセラーでもある。

その後、世界性の健康学会（WAS）の学術委員長でもあるAlain Gianniフランス国立衛生医学研究機構教授、臨床心理士でオーストラリア・パースのカーティン大学講師Matt Tilley、最後に、自らゲイである



Milton Diamond と通訳の Pamela Mitchell

ことを10代にカミングアウトし、マイノリティの権利擁護を中心に「世界性の健康学会ユース部門」副代表として活動しているAntón Castellanos Usigliの講義で締めくくられた。

各講師の自己紹介を兼ねた連続ミニ講義の後、「性犯罪と子どもの権利擁護」をテーマにしたPhillip TromovitchとConneie Diamond（ハワイ州・心理カウンセラー）のグループを加えた6つのセクションにわかつてディスカッションが行われた。

後日、3名の参加者から、参加したグループのディスカッションの感想を寄せていただいた。

Alain Giami を囲んで

神奈川県立汐見台病院産科副科長の早乙女智子さんは、次のように感想を寄せている。



私が参加したのは、世界性の健康学会（WAS）の学術委員長であり、フランスのIMSERM（フランス国立医学研究機構）所属のAlain Giami（アラン・ジアミ）先生を囲んで集まった10名のグループでした。ジアミ先生は、UNESCOChaireの「セクシュアルヘルスと人権」をHuman Earthという活動を通して推進しようとされています。同じグループには、大阪国際大学ジェンダー法学の谷口真由美さんや、淑徳大学大学院生の武子愛さん、NPO法人SEAN事務局長の遠矢家永子さんのほかGIDの当事者の方などがいらっしゃいました。

「性の教育とアドボカシー」というテーマの中で、性的マイノリティーに詳しいジアミ先生を囲んで、自己紹介をしながら、それぞれジアミ先生とのディスカ



Phillip Tromovitch



Alain Giami

ッションを堪能しました。個々の質問については個人的なことを含むので割愛します。

DSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders)^(注1) のGID診断基準の脱医療化については、DSM-Vでは、Gender Dysphoria(性別嫌悪)であったり、WHOではGender Incongruence（性別違和）というように、「障害」という表現を避けることで、当事者が病気であると認識しないで済むようになります。医療化しそぎることは、当事者を援助する一方で医療が障壁となりうることに繋がります。こうした動きはフランスでも30%の当事者が手術を受けざるを得ないことに対するジレンマとなっているようです。また、当事者の主体性を保つことも支援者にとって重要なことです。視点として大事なのはPanoptical（全視野的な）であるという説明もされました。これは、参加者一同、なかなか理解しがたかったのですが、衆人を監視する監視塔から見ているようなイメージで心理的観点から見る、つまり外からでもなく、どこかの片隅からでもない、全体を見渡す視点で性的なマイノリティーは語られるべきだという意味に受け取れました。

また、大変興味深かったのは、性別に関して自由記載できるアンケートをフランスで施行したところ、自分の定義に関して400種類の回答があったということでした。男女などという白黒ではなく、性別認識というのは、限りなく自由でグラデーションやバリエーションのあることなのだと思います。マイノリティーの労働市場に関する質問は、質問者の置かれた立場が大変厳しいもののように、政治的介入の必要性があり、現実問題として即座に解決するには至らないことですが、少なくともジアミ先生が理解して下さり、そ



Elizabeth Riley



Sam Winter



Matt Tilley



Antón Castellanos Usigli

の場の参加者もその苦悩を共有できたのではないかと思います。

こうした議論の場がもっとあると、様々な立場の相互理解が深まると思います。ジアミ先生も真剣に相談に乗って下さいました。この話し合いに参加して、勇気をもらえたという方もいました。英語と日本語のごちゃ混ぜのディスカッションで、英語力不足から思うように通訳できませんでしたが、初対面の方たちばかりの中で、大変有意義でリラックスした時間を過ごせたことに感謝します。

Matt Tilley のグループ

東京大学大学院総合文化研究科博士課程の正岡美麻さんは、長文の感想を寄せてくれた。



私が参加したのは、Matt Tilley（マット・ティリー）講師のグループだった。彼はオーストラリアのパースにある Curtin（カーティン）大学の講師であり、臨床心理士として個人での開業もしている。最初の自己紹介で Matt 先生は、LGBT やセクシュアリティの流動性、HIV や STI（性感染症）、sexual difficulties（セクシュアルディフィカルティーズ）についてを専門としている旨をお話された。

とくに、性機能の問題に対して、“セクシュアルディフィカルティーズ”という言葉を使う、つまり disorder（疾患・障害）や dysfunction（機能障害・機能不全・不能）よりも difficulty（困難さ）とそれを表現するほうが好きだ、とおっしゃっており、「“いわゆる普通”であるかどうか」、でなく「自己を受け入れていく」、ということに興味があるという話をし

ていた。ほかにも多彩な講師がおられたなかで、私はこの “disorder / dysfunction ではなく、difficulty という表現を好む” という彼の考え方に入り込んで、彼のグループでのディスカッションに加わることにした。

まず、最初に出たのは、私の興味を持った点と同じ “difficulty について” で、質問者はとくに、トランスジェンダーや性同一性障害などについても difficulty という言葉で捉えられるだろうかという点について意見を求めていた。実際、日本では出生時の性別とは異なるジェンダー・アイデンティティ（性自認）を持ち、出生時と異なる性別で生きようとする人を表現するのに、トランスジェンダーよりも性同一性障害という言葉の方が圧倒的に一般に知られており、「障害」として世の中に受け入れられてきたという感覚がある。

この件に関しては通訳を介しながらということもあり、なかなかお互いの主張がきちんと伝わらなかった感があった。しかし、ディスカッション後も彼の質問に Matt 先生は納得がいくまで一対一で対応を続けてください、「たとえば女性の体で生まれたのであれば、ジェンダー・アイデンティティが男性であっても、ヴァギナなどの女性器を用いたセックスをすることも一つのあり方として認められてしかるべき」という意見については一致していた。ただ、日本でそれが当然のこととして認められていくかとなると難しいね、ということを、その質問者と私は話した。

この話の流れで非常に面白かったのは、彼はいわゆる LGBT という括りにされるうちの、トランスジェンダーを除く “レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル” は difficulty とは思わないと言ったことである。それは人間関係に問題が出るか出ないかの話であって、セクシュアリティの特徴は difficulty ではない、



Milton Diamond のグループ（性教育）



Phillip Tromovitch のグループ（性犯罪と子どもの権利擁護）

という主張をされていた。さらに、彼はこうした人たちを“ノンヘテロセクシュアル”（異性愛ではないセクシュアリティを持つ人）という表現で語っており、その理由として、セクシュアリティは流動性があるものだから、ということを述べていた。

そもそも性機能の問題などに対して difficulty を使うことを推奨するのも、この言葉であれば「人間性そのものを否定しないのではないか」という考え方からであり、大学でも学生にはこの点を強調して伝えているそうである。彼の考えの根幹をここに見た気がし、私はとても新鮮な思いがした。一方で、このグループには脳性麻痺の方、車椅子使用者の方も参加していましたが、一般に障がい者というくくり方を日本ではされてきたであろう彼らは、自身のアイデンティティとして difficulty という言葉を使うことを好むのだろうかという点は、今回直接聞くことができなかったが、非常に興味深いと思った。

次に出た質問は彼の大学に関してである。彼が講師をつとめる Curtin 大学には、南半球で唯一の修士課程での“sexology（性科学）”の名を冠する学部が 30 年前からあるそうで、学部生（大学生）100 人強、修士課程学生 40 名弱、博士課程学生 10 名程度が現在在籍しているという。これには参加者の何人もが驚きの声を上げていた。北半球でも通常は sexuality（セクシュアリティ）や sexual health（性の健康）について学ぶ 1 コースがある程度にとどまっており、もっと広い概念としての sexology を総合的に学ぶ場はそうそうないようだ。それを踏まえると実にユニークな特徴ある大学であると考えられる。

ここでも「日本にはそんな場所はないけれど、どうやってその学部はできたのか。日本にもこうした学

部を設立することは可能か」という疑問がとんだ。彼は、そもそも Curtin 大学でも、1人の先生のたった 1 つの授業から sexology の講義ははじまり、それが好評だったことがきっかけで、最終的に一つの学部として成り立つまでに成長したという話をされた。

厳しい言い方をすれば「需要があり経営が成り立てば大学は何でも動く」そうであり、「どの相手にはどの言葉が通じるか」を考えながら、今使えるものを最大限に使って、受け入れられる言葉を用いて、ぬるぬるとテリトリーを増やし、上がっていくのが権利を獲得するうえで得策であろうとのことであった。私はこれまで、トップが「性科学部をつくるぞ」という働きかけをしなければ学部など作れないと思っていたし、そうなると日本でそれをすることは非常に難しいと考えていたが、こうしたボトムアップの方法が一つの学問領域を立ち上げたという Curtin 大学の実績は非常に希望をもてる例であると感じた。

ただ、周りのメンバーのなかには、日本の保守的さからオーストラリアのようにはいかないのではという点を不安視する人もいた。それでも、これは学部の設立にとどまらず、周囲の人に“性を科学する”という視点を伝える上で非常に参考になるテクニックであると思う。難しい言葉を並べるのでなく、相手が身構えないように、通じる言葉を選んで、使えるものを使って、説明をしていく。そして少しづつでも周囲の人の理解が進むというのは、一つの大変なステップではなかろうか。

この話に関連して、私は南半球唯一の学部であるならば、様々な国から留学生が来るのか、また一方、唯一であるからこそ、この学部で博士号を取得した人たちがみな性科学部に就職できるわけではなく、その後



Alain Giami のグループ

の進路はどうなっているのかという疑問を持ち尋ねてみた。留学生に関してはスウェーデン、シンガポール、ケニア、アメリカ、カナダなど様々な国からの卒業生を排出しているそうで、多い時は博士課程では留学生のほうが多数派のことわざもあったという。ただし、リーマンショック以降、留学生の数も頭うちになっているそうであり、現在は母国での通信教育と2回の来豪による実習というプログラムで修士号を取る学生もいるとのことであった。就職に関しては、もちろんみんなが性科学部にいられるわけではないが、性科学の素地を持った心理学者として、セラピストとして、社会学者としてなど、様々な分野で性科学を使って活躍しているとのことであった。

最後に、性教育やHIVの病院内教育について、すでに実践している人たちから、よりよい方法を聞きたいという意見がでた。私はこの分野に関しては専門ではないが、Matt先生がアドバイスをし、質問者が「それはすでに行っているが、もっとできることはないか」とさらに深い実践法を聞くなど議論は尽きず白熱していた。

先生以外のメンバー同士でも、「こういう人が既に日本でも活動をしているから連絡をとってみては」などと有意義な情報交換がされており、またMatt先生も自分たちの使っているワークショッププログラムの資料などが豊富にあることを紹介されていた。これは、英語として存在するたくさんの資源を、いかに日本で広めていくか（日本語に直し伝えていく人の存在がいかに重要か）を実感させられる出来事であった。

会の終わりにMatt先生は、自分は講師を務めながら臨床現場でも働いて忙しいこと、でも皆セクシュアリティに関するセラピーをすることを怖がり敬遠



Antón Castellanos Usigli のグループ

するために、今は自分がやらなくては、と思っていることをお話をされた。今後の臨床心理士のトレーニングは重要であり、特にセクシュアリティに対する見方、価値観を養うこと、そのために「どうしておかしいと思うの？」と聞き返す、そして考えてもらうというステップが重要、なぜならいつその人の価値観が変わらかはわからないから、そう締めくくられた。これは臨床心理士に限った話ではないだろう。私も今後、性科学やセクシュアリティの多様性に懐疑的な人に出会ったら、「どうしておかしいと思うの？」と聞いてみたいと思った。日本はオーストラリア以上に保守的かもしれないし、理解の少ない人も多いかもしれない。でも、聞き返してみる。意見を押し付けるのではなくて、聞いて考えてもらう。そこから、いろいろなことが始まる気がした。

今回のこの企画は、直前に島根県の松江で行われた、第12回アジア・オセアニア性科学会に参加した海外の講師陣を大阪にも呼びお話をいただくというものであったが、第13回大会はMatt先生の故郷、オーストラリアで開かれることが決定している。南半球で唯一性科学学部を持つ大学を有する土壌のあるオーストラリアでの“性を科学する”学会も、私は行って実際にその空気を肌で感じてみたいと思うし、どんな企画が飛び出すのか今からとても楽しみにしている。

トランスジェンダーをテーマに

最後のリポートは、2011年4月から約1年3か月カナダのトロント大学附属中毒および精神保健センターに留学していた佐々木掌子さん（日本学術振興会特別研究員）で、次のような感想を寄せてくれた。



Elizabeth Riley と Sam Winter のグループ



私が参加したセクションは、オーストラリアの Elizabeth Riley 氏と香港の Sam Winter 氏が講師を務めるトランスジェンダーに関するディスカッショングループだった。Riley 氏は、15 年以上この領域の臨床に従事しているシドニーの開業臨床心理士だ。子どものトランスジェンダーをめぐる当事者と家族、そして彼らに対応する教員や医療・福祉関係者に関する心理データをまとめ、まもなくシドニー大学から博士号を受け取るところである。

Winter 氏は、香港大学教育学部の心理学の准教授であり、特に最近ではトランスフォビアの研究を精力的に行っている。また、次に改訂が予定されている ICD-11（国際疾病分類第 11 版）^(注2)における「性同一性障害」の項目に関する改訂委員のメンバーのひとりでもある。この 2 人を囲って、大学生、現役の小学校教諭、高校の教諭など 10 名ほどが集まった。私も含め、特にトランスの子どもやその親子関係に関心を持つ面々だ。

海外でのトランスジェンダーの親子関係やトランスジェンダーの子どもの学校での様子について具体的なことを聞きたいメンバーに対し、Riley 氏は、カウンセラーとして受け持つケースについていくつか紹介してくれた。そしてそれは家族、そして学校の多種多様な受け入れと拒絶の話であった。家族には受け入れられているが学校ではいじめを受けている子、学校では友人も教師も受け入れているのに家族からは受け入れてもらえない子、家族の中でも祖母は受け入れてくれるが父母からは拒絶をされている子。それは日本の現状と似ているかもしれない。

しかし、さすがシドニーだと思われたのは、受け

入れの良い家族のなかには、保護者のためのセクシュアル・マイノリティ理解ミーティングを組織化した人がいるということだ。親や教員が保護者会で簡単な説明をする程度であれば、日本でもある話だが、そこから数歩も進んで親同士による相互理解ミーティングを立ち上げたのだという。無知や偏見がいじめに寄与していることを考えると、このような取り組みは上手に行えば、性的マイノリティの子どもを守ることにつながるだけでなく、まわりの子どもたちを加害者（いじめっ子）にさせない効果も期待できるだろう。

子どもの性別移行を親が、そして学校が受け入れる際に、「性同一性障害という診断は不要」と考えるのが、Riley 氏と Winter 氏の共通見解である。実際、Winter 氏は次に改定される ICD-11 で、「小児の性同一性障害」という項目を削除すべきだと改訂委員会で積極的に議論している立場だ。翻って日本の現状はどうだろう。もしも生徒が学校に対し異性として扱って欲しいと訴えてきたら、学校は「まずは病院へ行って診断書をもらってきて」と言うのではないか。そしてそれが得られるまで動かないのではないだろうか。

梅田駅近辺で行われた懇親会では、話の続きをしようとグループメンバーの数名が Riley 氏や Winter 氏の近くに座った。日本で経験している自らの体験もつと彼らと共有したかった人たちにとっても、よい時間だったようだ。

そのほかのセクションもたいへん熱のこもった実りあるものであった。なお、本性教育研究セミナーは、関西性教育研修セミナー実行委員会の主催、協賛・日本性教育協会、後援・関西エイズ対策協議会で開催された。次回、14 回目の「関西性教育研修セミナー 2012 冬」は、12 月 23 日（日曜日）午後 1 時より関西学院大学大阪梅田キャンパス 1004 号室で、「児童生徒の性暴力被害に対する学校での危機対応～スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの実践から～」をテーマに開催される。

(注1) Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders（精神障害の診断と統計の手引き）の略。アメリカ精神医学会によって定められたマニュアルであり、診断基準を例示したものとして広く精神医学界で参照されている。4 度の改訂 (DSM - IV) が行われており、近々 DSM - V が発表される予定である。

(注2) WHO では、ICD-10（疾病及び関連保健問題の国際統計分類: International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems Version 10）を ICD-11 へ改訂する作業を開始している。

ニューヨークリポート



カムアウトしたストレート男性のその後

「家族と友だちぜんぶに“カムアウト”しようって思うんだ」。親友のジョシュにそう計画を打ち明けたティムの物語の続きです。ジョシュは「そうだな、ゲイの立場に立ってみればおまえもそんなクソ野郎じゃなくなるかもな」と全面的に賛同してくれました。

25歳だったティムは自分の部屋の鏡の前で何千回と“カミングアウト”的練習をします。ジョシュ以外に誰もこの計画を知らない真冬のある朝、話があると出向いた兄の家のキッチンで、兄と兄嫁を前に、彼はその言葉を言い出せずに全身に嫌な汗をかきます。やがてやっと、「アイ・アム・ゲイ！」と不意に言葉が衝いて出たとき、引き続く静寂の中で彼は恐怖に怯え、震え、涙に溢れながら口に手を当てていたのでした。

「冗談だろ」。兄アンドルーの声はいつもと違っていました。カムアウトがこんなにも生きしい恐怖だとは知りませんでした。友達、家族、すべてを失うかもしれない恐怖。この計画は1年限定。でも人生すべてをその恐怖の中で生きねばならないとしたら……。

そのとき兄嫁がティムに歩み寄り、彼の首筋にやさしく手を当ててくれました。兄の顔がかつて見たことのない慈愛と庇護の表情に変わっていました。「ゲイだからといってあなたを遠ざけると思ってた？」と兄嫁が言い、兄もまた彼を抱き寄せてくれました。彼は気づきます。兄にカムアウトされたら自分は同じようにやさしく振る舞えていたろうか？ 詰問も非難もせずに、ただありのままを受け入れたろうか？

次は両親でした。一息ついてから彼は母親に電話します。母の声がすでに変わっていました。「知ってるわ。アンドルーから電話があった。自分をゲイだと思ってるのね」。「“思ってる”んじゃなくて、ゲイなんだ」「とにかくこっちに来て。話をしましょう」

母親は玄関の前に立って待っていました。そんなことは一度もなかったことです。車を降りて母の元へ向

かうと、彼女は両腕を前に突き出して彼を迎えました。「何があってもあなたを愛してる。わかつてゐるわね」。そう言う母の腕に抱かれながら、彼はどうして自分はエリザベス（レズビアンだと半年前に彼に打ち明けた友人）に対してそう言ってやらなかつたのかと激しく悔いていました。

彼は書きます。「カミングアウトが勇気だとは思つていなかつた。ゲイだと言うことはむしろ何かを諦めた臆病な行為だと思っていた。倒錯や罪を克服したくないからゲイだと開き直るのだと思っていた。でも今日のこのことは、カミングアウトがこれまでに知っていたすべての人生を危険にさらすような勇気のいる行為だと教えてくれた。尊敬に値する行為だと知つた」

ティムはその後、ゲイのカフェでアルバイトし、ゲイバーに出入りし始めます。ジョシュの他にはボーイフレンド役を頼んだゲイの友人と伯母にだけ計画を打ち明け、ほとんどの知人友人親戚に“カムアウト”しました。結果、95%の友人が話をしなくなりました。

ゲイのソフトボール・リーグに入り、練習試合をしていたときのことです。散歩の男性が彼らに向けてファゴット（カマ野郎）と罵声を浴びせました。自分で言うことはあっても言われたことのない蔑称。言いようのない怒りに彼は涙が止まりませんでした。しかし最もショックだったのはあんなに気丈に彼を受け止めた母が、実はその日記に「ゲイの息子を持つくらいなら医者に末期がんだと宣告されたほうがマシだ」と書いていたことでした。もっとも母親は、最終的には彼の“性指向”を受け入れて極めて保守的なクリスチャンからゲイ・コミュニティの味方に変身したのですが。

1年間の“ゲイ人生”を送り終え、再び「異性愛者のクリスチャン」としてカミングアウトして、彼はむしろ自身の信仰を強めたと言います。「保守的なクリスチャンでも大部分は心やさしい人たちだとわかった。ゲイに偏見を持つ連中はごくわずかなのに、声が大きいから目立っているだけだ」と彼は話しています。

きたまるゆうじ ニューヨーク在住（19年）ジャーナリスト／作家／元・中日新聞（東京新聞）ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために



第21回

ある決別

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態の MtF トランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

この秋は不思議なほど穏やかに授業ができます。わたしが穏やかになった? いや、きっと子どもたちがわたしを穏やかにしてくれているのでしょう。

閑話休題。

わたしは担任として3度卒業生を送り出しました。担任時代は、教員としての気づきと学びの日々でした。はじめて担任をした頃は、一人ひとりの生徒とわたしの間にしっかりとつながりをつくろうと思いました。そういうつながりを、とりわけしんどい子どもとつくれば、クラスはまとまっていくと考えていました。しかし、3巡目の担任のとき、わたしの考えに変化が起こりました。それは、「クラスづくりは、わたしと子どもがつながることではなく、子どもたち同士をつなぐことである」ということでした。それまでのわたしは、「しんどい子を真ん中に」と考えながら、実は自分をクラスの真ん中に置いていました。なにかが起ったときにはわたしが走りまわるだけで、その「課題」をクラスで共有することができませんでした。そのことに気づいたわたしは、クラスのコーディネーター役に徹することにしました。子どもたちをつなぐことで、不思議なほどクラスはまとまり、子どもたちは互いのしんどい話を出し合えるようになりました。

わたしがこのことに気づけたのは、実は YMCA のおかげでした。子どもの頃からずっとあこがれ続けたキャンプリーダーを、わたしは大学卒業後も続けていました。夏には3泊4日の小学生のキャンプにリーダーとしてかかわりました。グループづくりを通して、子どもたちを見つめるまなざしの大切さを学びました。冬にはスキーキャンプにかかわりました。子どもたちの指導はもちろん、スキー指導をするリーダーたちの指導もしました。スキーの指導を通して、「『できない』を『できる』にする喜び」と、そのためのスキルを学びました。キャンプリーダーの経験は、部落や在日の生徒との出会いと同じくらいの影響を、教員としてのわたしに与えてくれました。

しかし、それほどまでにわたしに影響を与えた YMCA と、トランスであることが理由で決別することになって

しまいました。ヒゲを剃り髪を伸ばし、変化はじめた「理由」を、キャンプ仲間である YMCA の担当者には言わなければならないと、わたしは考えました。同時に、長年一緒にキャンプをしてきた仲間であれば、きっとわかると信じていました。ある日、当時一番仲のよかった担当者と会う機会をつくり、自分の話をしました。数日後、わたしは呼び出しを受けました。「なんのことだろう」という疑問と「もしや」という不安が半々のまま、わたしは YMCA に行きました。そこにいたのは、一緒にスキーキャンプをつくってきたもうひとりの担当者でした。

「女性になろうとしている」と聞きましたが、どういうことですか?」「わたしは自分がトランスジェンダーということに気がついたのです」「トランスジェンダーとは?」「性同一性障害のほうがよく知られているかもしれません」「ほう障害なんですか?」。このままではいけないと思い、性別は変わってもスキーへの情熱もキャンプへの思いも変わらないとわたしは主張しました。それでもひとつ、わたしはキャンプ仲間であるということに賭けました。「キャンプに来る子どもたちの中にはきっと同性愛者の子もいます。セクシュアルマイノリティのリーダーがいることは、決してマイナスにはならないはずです」。しかし返ってきた答えは「YMCA のキャンプはセクシュアルマイノリティのためにやっているわけではありません」でした。小一時間ほどの話しあいの最後に、その担当者は突然「男にもどれよ!」と叫びました。それは、おそらく「もう一度一緒にやろう」という、わたしへの最後のラブコールだったでしょう。でも、わたしは「もうもどれないんです」と答える以外ありませんでした。それは、YMCA のキャンプとの決別を意味しました。

信頼していたキャンプ仲間に自分の思いが届かなかつたということ、そして現場をとりあげられたわたしの心は、少しずつ YMCA から遠ざかっていました。そして数年後、わたしを育ててくれた YMCA に抗議文を送る形で別れを告げました。トランスジェンダーとしてはじめてぶつかった、そして最大の壁でした。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

「この人といふ必要がない」

まだ余震が頻発し、原発事故の緊張が生々しかった時期、「震災結婚」ということが話題になった。彼らは未曾有の災害を経験することで、たしかな絆を育んでいく相手を得ること、そして家族を持つことの価値を再発見した。いざという時にこそ、人は自分にとって本当に大切な人に気づくのだろう。

反対に、想像外の事態に直面したとき、それまで見ないようにしてきた、あるいは、先送りにしてきた問題に踏ん切りをつけた人々もいた。それが、本書がタイトルにしている『震災離婚』である。著者の三浦天紗子自身、震災を契機に離婚したことから問題意識を抱いた。そして被災地における夫婦関係の破綻、遠隔地での震災離婚の実態をていねいに取材し、危機的状況を経た日本人の結婚に対する意識の変容を素描している。ここにはそれぞれの人生の、身を切るような思いが誠実な文章で綴られている。

被災をきっかけに夫のDVから脱する決断をした妻は、「…みんな何なくても生きてるんだから、私も何なくても生きていけるっちゃって思えた」と胸の内を明かす。また、津波で子どもを失った女性は、助けられなかつたことを責める夫の、やり場のない悲しみを受け入れつつも、别れることを選んだ。あるいは、子どもを被曝させたくないがゆえに福島から離れて暮らしあげた母親は、地元の復興に尽力する夫とすれ違いを生じても、夫より子どもを優先することを決めた。さらには、東北にボランティアに来た女性と地元の男性の不倫恋愛、配偶者よりも自分の親との生活を選んだ夫…。本書のレポートは、震災が人々の絆を固くするばかりでなく、それをほどいてしまう結果も招いている実態を、あますところなく伝えてくれる。

震災離婚

三浦 天紗子

イースト・プレス

震災離婚

三浦天紗子著

イースト・プレス

1365円（税込み）

統計データを引いて考察しているところによると、震災直後には若干、婚活熱が高まる機運はあったが、それほど婚姻数が増えたということはないらしい。「現実には、震災後に結婚願望が高まったのは女性の側だけではないか」と著者は投げかける。そして、「昔ながらの家長的責任を男性に持たせるのを女性の側もおおむね歓迎しているわけだが、結局はその重さが男性を結婚のフィールドから遠ざけ、女性も収穫の期待できない畠を耕している状況が生まれている」という皮肉な分析も行っている。

また、被災地（とくに沿岸部）で、配偶者による暴力の相談件数が増えていることや、外国人妻を娶る男性が多い地域では、フィリピン人妻が被災後も日本を離れていないのに対して、中国人妻の半数が帰国した、といった興味深い事象についても言及している。

一読してわかるのは、結婚へ走ったり離婚が増えたりという現象があったとしても、問題の本質はそうした現れの側ではなく、震災という出来事によって、人々が現在のパートナーとの関係や、生活のありよう、多少なりとも真剣に、シビアに向かい合うようになった、ということだろう。日本社会では長い間、夫婦は「空気のような関係」であることが是とされてきて、「なんとなく」続していくものでよかつたが、危機的状態では、こうした安易な紐帯は簡単にほころんでしまう。著者は取材するなかで何度も耳にした気になる言葉を書き留めている。

「この人といふ必要がない」

この言葉が指し示しているのは、積極的に別れたいわけではなかったが、よくよく考えてみたら一緒にいる意味もなかった、という身もふたもない事実。

極めて当たり前のことだが、いざというときに助けになるパートナーシップというものは、平素から思いやりあるコミュニケーションを積み重ねていくことでしか得られない。

（作家 伏見憲明）

► 2013年1月26日(土) 12:15～1月27日(日) 13:30 ◀

“人間と性” 教育研究協議会 理論と実践講座

内 容 講座「“いのち”の学習を問い合わせる」浅井春夫、樋上典子、鈴木幸子、実践紹介ほか。

会 場 JICA 地球ひろば国際会議場（市ヶ谷）

参加費・問い合わせ先等

参加費／両日参加：一般 6,000 円、会員 5,000 円、学生 2,000 円、1 日参加：一般 3,500 円、会員 3,000 円、学生 1,000 円。

定員／100 名。 問合せ先／〒 151-0071 東京都渋谷区本町 1-7-16 初台ハイツ 1006 号 “人間と性” 教育研究協議会本部事務所
TEL 03-3379-7556 FAX 03-3379-7561 ※電話は火・木曜日の 17:00～20:00 に受け付けています。

1/26 (土)
13:00
～
17:00

アーニ「性を語る会」新春シンポジウム
大切なのちといじめ～私たちが、いま考え、実行しなければならないことは～

【会 場】アーニホール

【問い合わせ先等】 〒 158-0097 東京都世田谷区用賀 3-5-6 アーニ出版内「性を語る会」事務局（担当：平）
TEL 03-3708-7326 FAX 03-3708-7324 E-mail info@ahni.co.jp

2/9 (土)
～
2/11 (月)

ハートブレイク セクシュアリティを伝えるための学習会
2013年度宿泊学習会～ベーシックコース～

【会 場】兵庫県篠山市・ハートブレイクセミナーハウス

【問い合わせ先等】 参加費／30,000 円 定員／10 名
主催・問合せ先／〒 564-0001 大阪府吹田市岸部北 3-29-11 ハートブレイク大阪事務所
TEL 06-7504-6489 (平日 10:00～17:00) FAX 06-7504-6490
E-mail heart-sasayama@nike.eonet.ne.jp

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約5万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】 必ず事前に電話で予約が必要です (tel 03-6801-9307)。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】 月～金曜日 10:30～17:30

【休室日】 土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】 コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚 10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室
利用方法

収集文献
・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼稚期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイアモンド文庫、ほか。

<http://www3.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>